



プラス薬局のコンセプトと空間の融合が評価され、「グッドデザイン賞2020」も受賞している。



- 1 正面入り口からみた店内。天井が高く仕切りのない開放的なつくりになっている。丸いベンチ椅子に腰をかければ、自ずと隣合わせた者同士会話が生まれそうな配慮の行き届いた空間が印象的。
- 2 床はあえて外と同じ高さで設計。地域に開かれた場所を目指すプラス薬局らしい工夫が細部まで施されている。
- 3 漢方相談コーナーに並べられた生薬見本。患者さんの相談に応じて提案した漢方薬をその場で煎じることのできる設備も。



プラス薬局みさと店

群馬県高崎市箕郷町矢原15-1
<https://www.pharma-plus.co.jp/>

医療の現場から

from the medical front

時をあらためて振り返る。薬剤師に求められている仕事とは何かを考え、できることから行動に移した。「在宅訪問も最初は見よう見まねで、窓口での服薬指導がそのまま家に行ったような、そんなところからはじめました。栄養剤を渡しているけど飲めていなかったり、湿布薬を大量に隠したまま使われていなかったり。薬局の中に居たら見ることでできない光景が在宅にはあったんです。患者さんには飲めない、使えない理由があるんですね。そこを正して、ちゃんと薬が使えるように、アドバイスをしました」。

「認定薬剤師として在宅の現場と向き合う」
薬剤師の機能拡大・薬局の機能拡張を通じて広く社会に貢献することを理念とし、2009年に設立された日本在宅薬学会。小黒氏は5年前に日本在宅薬学会の認定する在宅療養支援認定薬剤師の資格を取得した。薬剤師の取り組みを広め

適化」をすること。服薬の状況を把握して、その人に応じた薬の提案ができることが、薬剤師に求められていること。当時の経験が現在の基盤になった。

るエヴァンジェリストとしても認定されており、その活躍の場を広げている。「独立した当初、職員が一齐にやめてしまったことがあるんです。私自身は楽しい、正しいことをやっているはず。何かの間違っているんだらうか?」そんな悔しい気持ちを抱えながら参加した日本薬剤師会の会場で出会ったのが、日本在宅薬学会を主宰する狭間氏の書籍だった。「自分は間違っていないかった」と、背中を押された出会いとなった。薬剤師が在宅の現場に入り、患者さんに起きていることを個々に応じて薬学的な知識を使って考えること。バイタルサインとあわせて、薬学的な観点から、医師や看護師、介護に

携わるチームと意思疎通を図ること。薬剤師ができることを考え、行動し、様々な視点をもち、現場と向き合ってきた。「関わった患者さんの復調は喜びです。薬剤師にはその喜びを知ってもらいたい。そのためには自分の体験を伝えていかななくてはいけないと思っています」。エバンジェリスト(伝道師)として、講演や講習にも積極的に出向く。仲間を増やして、薬剤師本来の役割を果たせる環境に変えていきたいと思いを込めた。

「後編では『多職種連携の取り組み』についてお話を伺います。」



Interview with
Kayoko
Oguro

医療の現場から

from the medical front

地域に根ざす 真の薬剤師を目指して

【前編】

薬局に対し、処方箋の対応を中心とした量的な整備から、「かかりつけ」として機能の充実・強化を図ることが求められるなか、医療の一旦を支える存在として、薬剤師には人に寄り添う役割をあらためて問い直されている。今回訪れたのは群馬県高崎市に拠点を置く株式会社ファーマ・プラスだ。目指すのは、地域に根ざした健康拠点として、在宅医療や多職種連携に取り組む、本当の意味での薬局だ。昨今の薬局における実情にあらたな息吹を吹き込むかのように、その可能性を拡張させ、進化を続けるファーマ・プラスの取り組みについて、同社専務取締役である薬剤師の小黒佳代子氏に伺った。

小黒 佳代子氏

株式会社ファーマ・プラス 専務取締役 プラス薬局薬剤師

PROFILE

一般社団法人 日本在宅薬学会 評議員 / 一般社団法人 日本褥瘡学会 評議員

会話が自然に生まれる
場所にしたい

交通の要衝として古くから栄える高崎駅から車で20分ほど、住宅と田畑の広がる郊外で2019年に開店したファーマ・プラス3店舗目の新地が、プラス薬局みさと店だ。まるでカフェやギャラリーのような洗練された佇まいの外観が印象的な店舗は、小黒氏がプラス薬局の「集大成」と力を込める渾身の空間となった。外との境界線がわからなくなるほどに、広くあしらわれたガラス張りの室内。見上げると青い空からやわらかな光が差し込んでくる。自然と会話が生まれる居心地の良い場所にしたと、さまざまな工夫を施した。「地域の人が雑談したり、待ち合わせに使ったり、自由にコミュニケーションがとれる空間にしたいと思ったんです」と小黒氏は語る。建物中央にはセントラル調剤室を配置し、薬剤師が全体を見渡せるようになっていている。薬剤師の仕事に興味を持ってもらえるように、無菌室もあってガラス張り。仕切りをなくすことで、視線がつながる。緊張感をほぐしながら、来訪した人との距離が自然と近づく、そんな仕掛けが満載だ。

薬剤師に求められる仕事

現在、地域医療に根ざした薬局として、訪問看護ステーションや栄養ケアステー

ション、居宅介護支援事業所も展開するファーマ・プラスを立ち上げたのは2008年のことだ。立ち上げた当初から、薬剤師は在宅の現場に行くべきだという思いがあったという。かつて勤めた大病院では、何百何千と来院する患者に対して、ひたすら調剤して袋詰めをすることの繰り返しだった。その経験は、小黒氏を薬剤師の仕事から遠ざけた。子育てなどを経て、再び薬剤師として現場に戻った時に、「自分にしかできない仕事をしたい」と薬剤師としての信念を持った。復帰後に勤務したのは、当時急激に増えていた調剤薬局だった。そこでの仕事は意外にも、「自分に合っている」と感じたという。

小黒氏は調剤室を飛び出して、積極的に患者さんと会話をした。受診勧奨も積極的にこなした。なんども膀胱炎を繰り返す患者へ検査を促し、癌が見つかったこともあった。「当時、私のところに全部の処方箋をもってきてくださる患者さんが何名もいらっしゃいました。私から説明やアドバイスを聞きたいとおっしゃってくれるんです。薬局薬剤師って、けっこういろんなことができるんだと気づきました」

もっと患者さんに関わっていくにはどうしたら良いか。考え、たどりついた答えが在宅薬剤師だった。「調剤報酬点数表を見ると、いままで算定したことのない点数がたくさんあったんですね。長期投薬情報提供料が良い例です」と、小黒氏は当